

学校名 (児童数)	甲賀市立甲南第一小学校 (355名)
--------------	-----------------------

(本研究に係る問い合わせ先)

所在地：滋賀県甲賀市深川 1728 番地 1

電話番号：0748-86-2074

【研究の目的，研究内容】

(1) 研究主題

『授業改善で生み出す主体的な学び』

～「書く力」に重点をおいた言語活動の充実を求めて～

(2) 研究主題設定の理由

昨年度の本校の児童の全国学力学習状況調査から明らかになった国語科における重点課題は次の3点である。

- ① 目的に応じて資料を読み、分かったことを的確に書くこと
- ② 国語に関心をもち、進んで読書をする
- ③ 普段の授業で、自分の考えを発表する機会や、友だちと話し合う機会を設けるようにすること

これらは一昨年度の同調査でも明らかになった課題でもある。本校では、これまで本事業と関わって「授業改善で生み出す主体的な学び」を主題として、「書く力」に重点をおいた言語活動の充実を図って授業改善を進めてきた。

本事業で行ってきた2年間の国語科の授業改善の重点は次の3点である。

- ① 自校での評価問題の作成から授業改善を図ったこと
- ② 単元を貫く言語活動の中で「表現としての書く力の育成」を図ったこと
- ③ 日々の国語科の学習において「書く基礎技能の育成」を図ったこと

以上のような取組をした結果、次のような成果と課題が明らかになった。

成果の1点目としては、評価問題を作成することで付けたい力とは何かを単元を通して教師も児童も意識でき、それに合った言語活動が展開されるようになったことである。

2点目は、「書く力」についても、今児童にどのような「書く力」が必要となるのかを見極めて指導することで、的を絞って「書く力」を伸ばすことができたことである。

3点目は構想段階から交流活動を取り入れることで、考えが伝わりやすい文章にして書く力の育成が図れるということが明らかになってきたことである。

課題の1点目は、評価問題についてもっと吟味し、問題の質を上げていく必要があるということである。

2点目は各学年で系統性を更に意識して「書く力」のスキルアップを図る必要があるということである。

3点目は、設定された学習活動の流れに沿って資料を読み取ったり、相手を意識して自分の考えを文種に応じてまとめたりする力を育成する必要があるということである。

4点目は「書く力」だけでなく、「書く力」につながる「読む力」や「話す・聞く力」も深めていくことが必要であるということである。

以上のことから、今年度は、昨年度に引き続き評価問題の作成から授業改善を図ること、課題解決型の授業改善を図ること、目的や方法を明らかにした交流活動を適宜取り入れていくこと、書く力の系統性を考えて指導を具体化することに取り組んでいくこととした。昨年度に引き続き研究主題を「授業改善で生み出す主体的な学び」と設定し、

本校の児童の課題として挙げている「書く力」に重点をおき、付けたい力を意識した言語活動の充実を図る授業へと更に改善することで、目的意識をもった主体的な学びを展開し、学力向上へとつなげていきたいと考える。

(3) 研究体制

『授業改善で生み出す主体的な学び』
～「書く力」に重点をおいた言語活動の充実を求めて～

この本のおもしろさを3年生の人に本の帯で知らせたい!

(めざす子どもの姿)

- ・自ら課題を見つけ主体的に解決していこうとする子ども
- ・自分の思いを「書く」ことで言葉豊かに伝え合い、高め合える子ども
- ・自己の振り返りによって自分にどんな力がついたのか実感し、次の学習へと生かそうとする子ども

こう書いた方が読む人に大事なことが伝わると思う

(教師)



(子ども)

課題解決型の学習
付けたい力を付けるための単元構成
言語活動の充実・単元を貫く言語活動へ書く活動に重点<
付けたい力がどの程度ついたのでかを見極める評価問題の作成と活用

(めあてにそった学習の振り返り)
自分にどんな力がついたのでか自分で実感・評価ができる

(小集団またはクラスでの交流)
一人学びを交流で広げ、深め、高め合う

(一人学び)
見つけた課題について学校や家庭で一人学びする

(課題を見つける)
目的意識をもった読みで自分の課題を見つける

(意欲を高める・見通しをもつ)
どんな力を付けるための学習なのか理解する

(国語科における言語活動の充実)

「評価問題の作成から授業改善を図る」

- ・付けたい力を見極め、評価問題を作成
- ・付けたい力を見つけるための言語活動を設定する

課題解決型の学習
目的意識をもって主体的に学習
自分の思いをことば豊かに伝え合い高め合える集団
自己の振り返りでどんな力がついたのでか実感・活用

「書く力」Up

- ① 表現としての「書く」力の育成
 - ・授業改善による「書きたくなる」内容の耕し・相手意識
- ② 「書く」基礎技能の育成
 - ・「書く」活動の日常化・条件に即して書く指導の充実

(4) 1年間の主な取組の経過

4月15日 (水)	校内研究推進委員会①
4月20日 (月)	第1回校内研究全体会
4月下旬	全国学力・学習状況調査の自校採点・分析
5月26日 (火)	校内研究推進委員会②
5月27日 (水)	校内授業研究会 (特別支援学級) そま2組自立「4コマ物語をつくろう」～アニメキャラクター編～ 第2回校内研究全体会 (本校の学力学習状況調査の結果と分析についてと、学力学習状況調査の特徴的な問題を採点することで評価問題について学び授業改善に活かす)
6月8日 (月)	研究推進委員会③
6月10日 (水)	校内授業研究会 1年生 「どうぶつのからだについてしらべたことを、せつめいぶんにあ らわそう」 「くちばし」 光村図書1年
6月15日 (月)	研究推進委員会④
6月24日 (月)	校内授業研究会 6年生 「新聞の投書を書く工夫を知り、投書を書こう」 「新聞の投書を読み比べよう」 東京書籍6年
7月31日 (火)	第3回 校内研究全体会 (学力向上アプローチ事業4年生の授業研究に学ぶ～単元の構想 と評価問題作成)
10月8日 (木)	研究推進委員会⑤
10月20日 (火)	学力向上アプローチ事業 校内授業研究会に関わっての訪問 指導助言：村田 耕一 県教育委員会学校教育課主査 授業研究会 1年生 「じどう車のしごとやつくりについてしらべたことを、じどう車 せつめいカードにかこう」 「じどう車くらべ」 光村図書1年
10月28日 (水)	学力向上アプローチ事業 校内授業研究会に関わっての訪問 指導助言：白石 牧恵 県教育委員会学校教育課指導主事 授業研究会 4年生 「3年生にクラブの魅力をポスターで伝えよう」 「目的や形式に合わせて書こう」 東京書籍4年
1月12日 (火)	研究推進委員会⑥
1月19日 (火)	学力向上アプローチ事業 校内授業研究会に関わっての訪問 指導助言：村田 耕一 県教育委員会学校教育課主査 授業研究会 2年生 「語や文のつながりに気をつけて『みんなを助けるおたすけあな 図鑑』を作ろう」 「あなのやくわり」 東京書籍2年
2月3日 (水)	研究推進委員会⑦
2月10日 (水)	授業研究会 3年生
3月9日 (水)	第4回 校内研究全体会 3年次のまとめ

(5) 具体的な研究内容・方法、研究を進める上での工夫点等

◎単元の構想と評価問題の作成・活用～「書く」力の育成を意識～

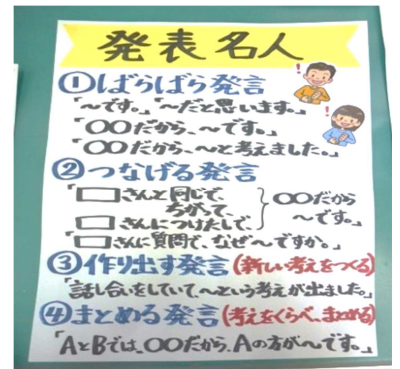
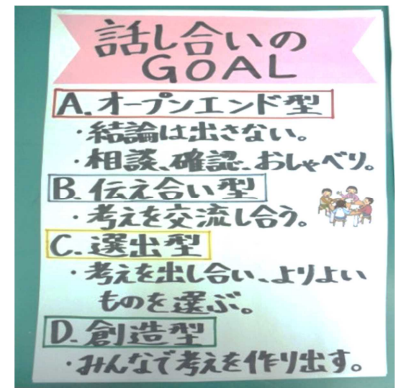
- ・付きたい力はどんな力なのか、その力を付けるためにどのような学習を組むのか、単元のどこでその力を付けていくのか、そして、どのような問題ができればその力が付いたと評価できるのか、評価問題の作成と単元の構想を一緒に考えながら進める。



自分の調べた「じどう車のはたらき」について友だちに知らせよう（1年）

○表現としての「書く」力の育成～授業改善による書きたくなる内容の耕し～

- ・絞った付きたい力と単元を貫く言語活動を計画、実践していき年間指導計画を作り上げていく。
- ・課題解決型の授業へと改善を図り「書く」に重点をおいた言語活動の充実を図る。
- ・必然性のある「書く活動」を設定する。相手を意識して自分の考えを文種に応じてまとめる活動を取り入れる。
- ・交流を有効に取り入れる：書くための情報集めの段階や、文章構成の段階、文章を書いている途中段階、書き上げた後の推敲段階など、それぞれの段階で交流タイムを取ることで、自分では行き詰まっても友だちのアドバイスを聞いて書き進めることができたり、よりよい文章に仕上げたりすることで学び合いの良さを実感できるようにする。
- ・交流の目的・方法を教師も子どもも意識することで、主体的な学びを更に引き出すことや、「書く力」につながる「読む力」「話す・聞く力」も深めていく。
- ・付いた力を児童も実感できるような手立てを考える。
- ・学年で1つの研究授業を実施する。



○「書く」基礎技能の育成～「書く」活動の日常化

- ・ことのはベーシックなどで思いや言葉や文章で伝えるスキルアップを図る。
- ・文型を意識した「書く」活動を取り入れる。
- ・文章を要約したり、字数や様式などの与えられた条件に即して書き換えたりする。言語活動を多く取り入れるなどの指導の充実を図る。
- ・児童の成果物も含め実践を残していく。



下書きをグループで推敲する（4年）

○日々の授業で「書く」力の育成・他の教科での授業改善や家庭学習の見直し

- ・単元での付きたい力を整理し、本時のねらいを明確にした授業を展開する。
- ・普段の授業でも授業の振り返り、まとめなどを取り入れるなど「書く」活動を意識的に取り入れ、日常化し、自分の思いをことばや文章で表すことに抵抗感を無くしていく。
- ・家庭学習の内容を、A 予習的なもの、B 復習的なもの、C 学習の発展的なもの、D 自分の興味あることを追究するようなものに分類することを教師が意識する。

評価問題の場面設定をする際にも、できるだけ4年生が伝えたいと思えるような素材を探した結果、4年生の社会科で滋賀県について学習をしていることから、滋賀県の魅力を伝えるポスターを作って県外の人に知らせるといった学習場面を設定した。そして、単元の学習で取り組む「事例を挙げて説明すること」については、滋賀県の魅力を事例や理由を挙げて紹介する問題や、グループでの推敲を受けて小見出しを付ける問題、滋賀県にたくさんの人が観光に来て魅力を知ってもらえるよう呼びかけの文章を作るといった問題を作成した。

単元の学習では、始めに子どもたちに教師が作成したクラブのポスターモデルを見せ、ポスターを完成させるために必要となることを児童に考えさせた。これは本校がめざす主体的な学びを引き出すことにつながるためである。単元の指導計画を児童とともに立てることで児童自身が「付けたい力」をより意識できると考えた。

単元の学習では、授業時間以外にクラブ活動についての取材も行い、学年全体で同じクラブの者で情報の収集を行った上でポスターの作成へと入った。本単元は教科書教材でポスターの書きぶりを学び、自分のポスターづくりに活かす入れ子方式の学習方法を取った。

更にポスター作成の段階ごとに適宜交流を入れて3年生にクラブの魅力をよりわかりやすく伝えられるよう推敲していった。

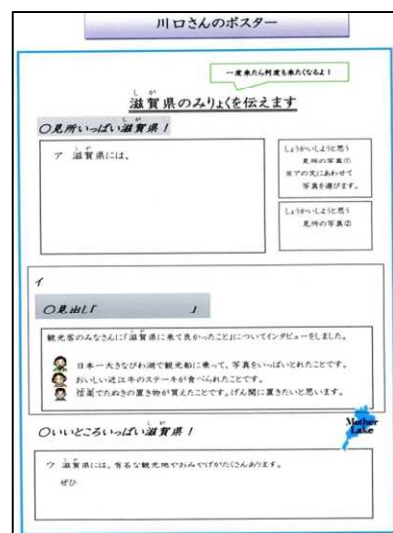
ポスターの構成内容の一つ目のクラブの活動内容については、具体的にどんなことをしているのか事例をあげて書く力を授業で付けていった。

また、題名や見出し、付加するキャッチコピーを工夫することも授業の中で学習をした。伝えたいことが端的に、しかも印象深く表せているかをグループでも交流した。

ポスターの構成要素の三つ目の自分たちのクラブに入ってほしいことを伝えるための効果的な呼びかけの文章を書くことも授業で学習した。

これら学習では、児童自身が単元の導入時に目的意識と相手意識をしっかりと持つことができ、自分たちがどのような力を付けたらよいのかも把握していたため学習がスムーズに進んだ。教師の側もどの段階でどのような力を付けたらよいのかわかっている、どのような支援をしたらよいのか個別の対応もしやすかった。

評価問題についても単元の構想と関連づけて並行して作成したために、授業で付けた力をはかるのに適した評価問題となったと考える。評価問題を受けた児童が問



評価問題用に作成した滋賀県の魅力を伝えるポスター（4年）



早くできた人で交流→グループで交流（4年）



交流を受けて再度自分で推敲し直す（4年）

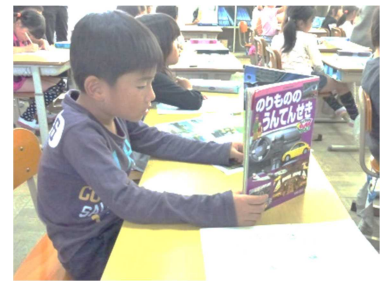
題場面の把握に手間取らなかったことから、単元に合った評価問題であったと考える。

昨年度までの課題であった、付けたい力を付ける単元の構想と評価問題をいかに関連づけるかについて解決の糸口が見つかった実践であった。

○表現としての「書く」力の育成 ～授業改善による書きたくなる内容の耕やし～による成果

今年度の授業研究を重ねる中で話題となるが多かったキーワードは「伝えたい内容」と「相手意識」である。自分が調べたことや感動したこと、驚いたことを児童は誰かに伝えたい。その思いが強ければ強いほど、よりわかりやすく相手に伝えようとする。目の前にいる児童が何に興味を持ち探究していくのか、またそれをどの相手に伝えたいのか、それをどのように伝えたいのかより効果的に伝えられるのか、更に一連の活動の中でどのような力を付けたいのかを見極め単元を構想していくことで、表現としての「書く」力の育成が図られることが分かってきた。

1年生の実践で「さかなのかくれかたおしえます」や「じどう車のしごとやつくりについてしらべたことを、じどう車せつめいカードにかこう」では、自分が興味を持った魚やじどう車について、いろいろな本で意欲的に調べる1年生の姿が見られた。そして自分が驚いたことやすごいいと思ったことをクラスの友だちに伝えるために、教科書教材で学んだ説明の仕方を元にまとめていった。休み時間にも関連する本を読んだり、「このじどう車すごいで」と話をしたりする姿も多く見られた。



教科書教材から説明カードを書いた後、自分が説明したい自動車について調べる（1年生）

○交流を有効に取り入れることでの成果

1年生の活動では、できあがったものを交流すると、友だちの「さかなのかくれかたカード」や「じどう車せつめいカード」に対して「おこぜってそんなふうにかくれているんだね」「災害救助車の仕事がよく分かったよ」など付けたい力につながる評価をすることができた。また4年生でも、できあがったポスターに対して3年生から「クラブの内容がよく分かったから来年そのクラブに入ってみたくなったよ」というような付けたい力につながる評価を相手からもらえる結果となった。

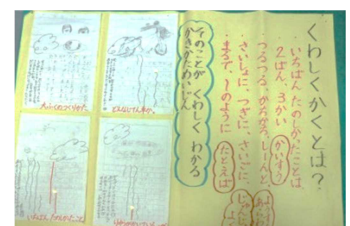


書き上げた児童で推敲する（4年）

また、昨年度からの研究からも明らかなように作品ができあがった時点で交流するだけでなく、作品を仕上げる各段階での交流を入れることで、よりよい文章に仕上げたり、一人で書くことが難しい児童もみんなのアドバイスをもとに書き上げることができたりといった効果が今年度も見られた。

○「書く」基礎技能の育成～「書く」活動の日常化での成果～

授業研究会を重ねていくことで、学習指導要領に出ているその学年で付けたい「書く」力を普段からも意識して指



「あのね帳」での指導（1年）

導できるようになってきたように思う。国語の授業において、ピンポイントで付けたい力を付けるスキルアップのような活動を続けることはもちろん大切である。しかし、国語科で付けた力をいかに日常的に使用できるかというところまで教師が意識することで、より大きな児童の力になることも分かった。

また、日常の「書く」活動や言語活動についても、相手を強く意識できるよう設定することで、教師の側から字数や使う言葉を指導するだけでなく、児童自身が考え工夫することで「書く」力がアップすることも実感できた。

○日々の授業で「書く」力の育成・他の教科での授業改善による成果

今年度他教科等でも付けたい力に関わっての「めあて」の設定、「めあてにそったふりかえり」をすることを全校で取り組んでいった。また、自分の考えを発言するだけでなく、出来るだけノートに書いてみる活動もできるだけ多く取り入れてきた。話せることと書けることは必ずしも一致しないことが全国学力・学習状況調査の結果からも明らかになった本校の弱みの一つでもあった。そのためできるだけ自分の考えや友だちの考え、分かったこと、考えたことなど短い言葉ではあっても自分の言葉でまとめることで、考えたことをまとめて書く力も徐々にではあるが付いてきたように思う。

(2) 課題等

◎国語科での授業改善を他教科等に広げていくこと

国語科で培われた生きて働く言語の力を他教科で活かしてこそ、更に児童の言語の力、ひいては、学力を向上していけると考えるが、まだ十分に活かしているとは言えない状況であり、具体的には以下のことが今後の課題となると考える。

・評価問題の在り方を今後も追究していく必要がある

評価問題を自校で作成するようになり2年が経った。この間、評価問題を作成することで「付けたい力を絞ること」「付けたい力をどのような言語活動で付けるのか」「付けた力をどのように評価するのか」といった「付けたい力」をキーワードに授業改善を進めることができた。また、授業改善を進めることで児童に「書く力」が付いてきたことも実感できるところまできている。

今年度は、評価問題の結果の分析についても少しずつではあるが取り組んでいった。授業で付けられたと思った力に関しても、違う場面設定で使えるかどうか問うことで、授業で足りなかった部分が見えてきて事後の授業などで補充したり、継続して指導していったりと修正を加えることも出てきた。

児童の解答分析とともに、問題の場面設定や内容については昨年度に引き続き、吟味していく必要がある。

また、国語科の評価問題を作成することで進んだ授業改善を、他教科でも更に活かし、評価の在り方について今後追究していく必要がある。

・「伝えたい」という思いや相手意識をもつことで更に主体的な学びを引き出していく必要がある

今年度の研究では、児童が「伝えたい」という思いが強ければ強いほど、また、「誰に伝えたいのか」と相手を意識することで、よりわかりやすく相手に伝えようとするのが強く実感できた。目の前にいる児童が何に興味を持ち探究していくのか、またそれをどの相手に伝えたいのか、それをどのように伝えるとより効果的に伝えられるのか、更に一連の活動の中でどのような力を付けたいのかを見極め単元を構想していくことで、表現としての「書く」力の育成が図られることが分か

ってきた。また、交流場面の設定についても目的意識を持たせることで、ともに学ぶ良さを児童自身が感じられ、自信がもてたり、相手のすごさを実感したり、ともに学ぶ良さの実感にもつながったと考える。

他教科等においても自分の考えや思いを伝えたいくなるような課題解決型の授業、探究の場を設定することや、考えや思いを交流する場面の設定について吟味して実践していく必要がある。

・「読み取る力」や「話す・聞く力」を付けていく必要がある

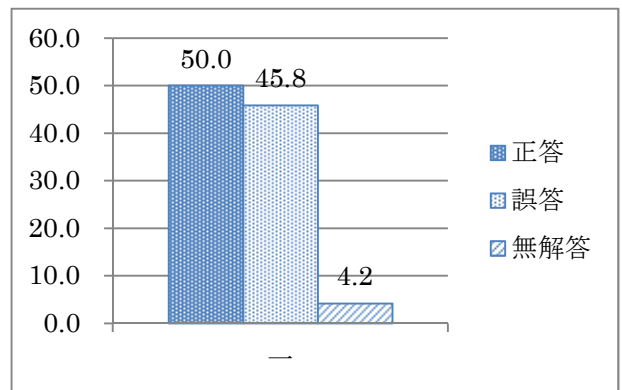
「付けたい力を付けるために言語活動」の体験を重ねることで、目的に応じて資料を読み取ることや、相手や設定によって文種を考えまとめていくこと、また、交流場面でポイントに沿って話し合うこと等については、少しずつではあるが慣れてきたように思う。

◎評価問題の結果から見えてきた課題

評価問題□では滋賀県の見所について建物、自然についてそれぞれ事例を挙げて紹介する問題である。

正答例にあるように、「見所」が上位語であり、その下に「自然」と「建物」があり、それぞれについて具体例を挙げる必要がある。

授業で言えば、クラブの活動内容について具体的例を挙げて書く場面である。授業では練習内容や制作した物など、具体例が比較的わかりやすかったが、評価問題では、誤答例1にあるように、この設定では具体例にあたる物は何か考えにくい児童がいた。また、誤答例2にあるように、問題場面の設定に関わりなく、自分の思いで書いてしまう児童もいた。自分ではない他者となって書く体験というのは4年生のこの段階でも経験が少ないということも原因と考えられるが、評価問題の文章を的確に読み取れていないことは今後の課題となる。



問題□ 集計

滋	賀	県	に	は	、	見	所	が	た
く	さ	ん	あ	り	ま	す	。	例	え
ば	、	自	然	だ	と	び	わ	湖	が
有	名	で	建	物	だ	と	、	彦	根
城	が	有	名	で	す	。			

問題□ 正答例

滋	賀	県	に	は	、	美	し	い	自
然	が	た	く	さ	ん	あ	り	ま	す
	た	と	え	は	い	ぶ	き	山	、
沖	島	が	あ	り	他	に	石	山	寺
や	彦	根	城	が	あ	り	ま	す	。

問題□ 誤答例1

滋	賀	県	に	は	、	乃	こ	ね	い
よ	う	が	あ	り	ま	す	。	乃	こ
ね	い	よ	う	に	は	、	り	る	さ
う	ら	が	い	ま	す	。	乃	ま	え
は	乃	こ	に	あ	り	ま	す	。	

問題□ 誤答例2

評価問題二は、伝えたいことを端的に書いている見出しを選ぶ、また、話し合いを受けて見出しをどう付けたかを選ぶ選択式の問題である。

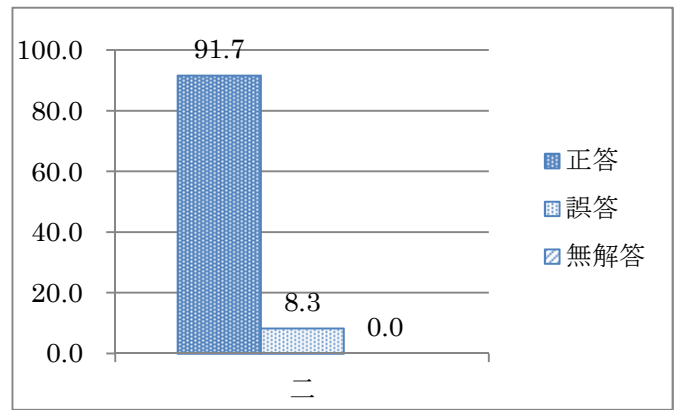
小見出しの付け方は一学期の新聞づくりでも学習したので集計表の結果からも分かるように正答率が高かった。

評価問題三は、滋賀県に来て滋賀県の魅力を知ってほしいという目的を達成するために呼びかけの文章を考えて書く問題である。

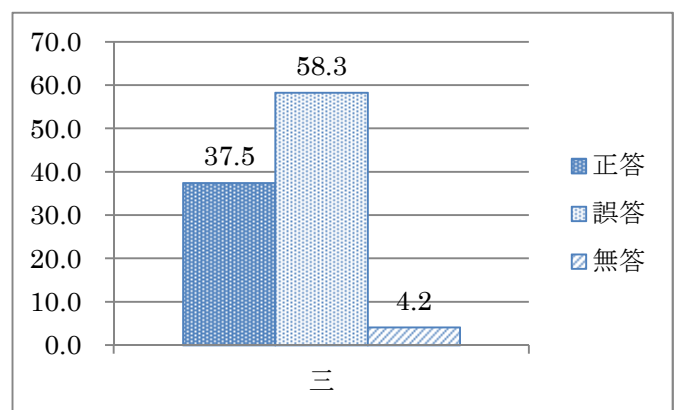
授業でも、「ぜひ、〇〇クラブに入ってください」ではなく、「ぜひ、〇〇クラブ入って一緒に～しましょう」という目的に応じての呼びかけが出来るように書く場面があった。しかし、「滋賀県にきてください」という呼びかけで終わってしまう児童がかなりいたことや、誤答例のように問題の場面設定とは離れ、自分の思いを前面に出してしまう児童も多かった。問題一の分析のように問題の意図を読み取れないことが誤答の原因の一つと考えられる。

目的に応じて呼びかけることについては、この後の別のテストでも試す機会があった。このテストでも、目的に応じた呼びかけができない児童がいたため、目的に応じた呼びかけの文章を書くことについては再度指導した。

授業ではできたと思っていたことが、評価問題の中で、別の設定場面で試すことで、その力が他の場面でも使える、生きた言語能力と言えるのか、という見取りができ、また足りない部分は何かということが見えやすくなってきた。生きて働く言語の力を培うための授業のあり方、評価問題の質も含め引き続き今後の大きな課題である。



問題二 集計



問題三 集計

ぜ	ひ	滋	賀	県	に	観	光	に	来
て、		み	り	よ	く	を	知	っ	て
く	だ	さ	い	。					

問題三 正答例

ぜ	ひ	滋	賀	県	に	来	て	び	わ
湖	や	彦	根	城	を	見	て	み	ま
し	う								

問題三 誤答例